

序文

パラタクシス詩学とは何か。

現代詩は難解だと言われる。しばしば、シンタックスが崩壊していたり、意味不明の言葉が羅列されていたりする。それが、無意味になれば、単なる出鱈目である。そこには、何らかの意味や、原理のようなものがなくてはならない。

ドイツの詩人ヘルダーリンの詩にやはりシンタックスの崩壊したような詩があり、そこに、パラタクシスという概念を当て嵌めて説明したのが、フランクフルト学派の哲学者アドルノだった。パラタクシスは、複数の文章を、交差させ、それがランダムに行われているようにみえるので、シンタックスが崩壊しているように感じられる。

私たちのパラタクシス詩学は、まず杉中が詩のシンタックスを崩壊させたり、詩を難解化させたりするための原理のようなもの、概念的なものを提示し、その概念を基

にして、野村が、実践編として具体的に詩の形にするというものである。

野村は非常に困難な役回りを演じている。ヘルダーリンは、パラタクシスという概念に基づいてシntaxの崩壊した詩を書いたわけではない。ヘルダーリンの詩を説明するためにアドルノがパラタクシスという概念を用いただけである。だが、野村は、杉中が提示する厚みのないパラタクシスという概念に肉付けして、新たな詩を作らねばならない。杉中が提示する細い骨のような概念の数々に、野村は次々に血を通わせ、詩へと肉付けしていく。

概念はパラタクシス以外にも、さまざまに提示され、その都度、野村はそれを鮮やかに詩にしていく。パラタクシス詩学は、新たな詩の書き方の提案でもある。

パラタクシス詩学の中で、中間休止というヘルダーリンが用いた概念を杉中が提示すると、野村は、それを俳句の切れのようなものだと言っている。同じく俳句の比喻で言うと、パラタクシス詩学の、往復書簡という体裁は、俳諧の付け合いのようなものと言えるのではないだろうか。杉中が概念を提示する。それに対して、野村が詩を書く。さらに、野村の詩に杉中がコメントする。さらに、それに対して野村がコメントする。お互い少しずつずらして、コメントしていく様は、俳諧の付け合いのようなものではないだろうか。

共同で書く。それは、アンドレ・ブルトンがシュルレアリスムを作った時に用いた原理的な方法であった。ブルトン「スポーツ」の『磁場』（一九三〇）の複数性は、普遍性を得るための方途でもあった。だが、その複数性から普遍性へということであれ

ば、日本にも俳諧の座という方法があった。パラタクシス詩学は、詩の難解さを方法化するという柱と、共同で書くという柱、二本の柱を持っている。

パラタクシス詩学という書物全体が、ひとつの原理論であると同時にひとつの詩なのである。

杉中昌樹

この往復書簡には日付がない。うっかりしていたのか、あえて日付をつけなかったのか。メールでのやりとりなら自動的に日付が残ってしまうが、われわれは郵送という時代錯誤的手段を利用したのだった。いつ始まり、いつ終わったのかということに無頓着なもの、あるいはこの「パラタクシス詩学」にふさわしいかもしれないと考える。

往復書簡自体のやりとりはこんな感じだった——ある日、予告もなしに、小樽の杉中昌樹からしかじかのコンセプトを記した手紙が届く。それを受けて私は詩作に取りかかるわけだが、ちょうど締め切りの仕事を抱えていたりして、すぐに詩作に入れないうちもある。場合によっては、ひと月ふた月書けないまま時が過ぎてしまう。逆に、コンセプトを受け取った翌日に書いてしまうこともあり、要するにすべてが不定で非

限定なのだ。だからこの「パラタクシス詩学」は、本来未完であり、あるいは未完のまま放置されて、後年誰かに発見されたりして然るべきだったかもしれない。

日付をもたないことは、じつは深い意味をもつ。こんにち行われている詩論のほとんどは状況論である。いまの時代を反映しているとかいえないとか、詩として時代に対峙しているとかいえないとか、こういう時代に詩はこうあるべきだとか、こう書かれるべきだとか。言い換えれば、日付そのもののような論が多い。昨日には存在し得ず、また明日には消えてしまうような論が。

そういう詩論の現状に、この『パラタクシス詩学』は一石を投じたのである。もちろん私たちは陳腐な普遍性や永遠性を対置したいわけではない。ただ、詩論はもう少し開かれてあるべきだと思うのである。そう、詩の業界にだけ通じる状況論にガラパゴス化してしまうのではなく。これがわれわれのスタンスだ。さらに言えば、そういうサークルでは、どうやら私の詩はあまり理解されないようだ。反面、望外にも海外では評価されたりもするので、いつだったか、そのあたりのちぐはぐな事情に杉中さんが反応してくれて、私の詩を世界文学や現代思想への開かれのなかに位置づけたという思いを語ってくれたこともある。本書成立への隠れたモチーフかもしれない。

また、本書には、往復書簡による詩と詩論の融合というジャンルのな目新しさもあるかと思う。散文に詩が混じり、論がすすんでゆく。一種の歌物語といえるか。主に私が詩を、杉中が詩論を担ったわけだが、もちろん双方向的に、詩論は詩において生かされ、詩は詩論へと還流してゆく。ひとりの場合でもそれは起こり得るが、本書の

場合、ふたりの共同作業がそれをより可視的なものとしたのである。そういう意味では、杉中も序文でたとえているように、俳諧の付け合いに近いものがあるかもしれない。

出版に際しては、水声社社主、鈴木宏さんのご厚意を得た。現代詩を外へと開くための、これ以上はない場を与えられたことになる。編集は廣瀬寛さんのお世話になった。記して感謝申し上げたい。

野村喜和夫